

# 2018年 梁川通り100周年



## Yamagata 100<sup>th</sup> anniversary

### 梁川通り歴史物語

「梁川通り」の名は明治時代の官僚であり、一帯の大地主でもあった榎本武揚にちなんで100年あまり前に付けられた。かつては人家もまばらだった一帯で土地開発事業が行われ、やがて市街の中心地として賑わうまでのストーリーをまとめてみた。

#### 榎本武揚、北垣国道と小樽

##### ◆2人揃って小樽市内に広大な土地を購入

梁川通りやその周辺の歴史を語るにあたり、欠かすことのできない歴史上の人物が、2人いる。

1人は**榎本武揚**(1836~1908)。名はただけあきだが「ぶよう」と読まれることも多い。江戸時代末期、オランダ留学で得た軍事、海軍、国際法など広範な知識を買われて幕府海軍副総裁の地位にあった人物だ。新政府樹立直後には「蝦夷共和国」としての独立を目指し、旧徳川藩士らに乗せた艦隊を率いて北海道に向かう。そこで五稜郭を占拠し、およそ7ヶ月のあいだ、新政府軍を相手に「箱館戦争」を戦う。結果は敗北。榎本は投獄された。

しかし反乱軍を率いた重罪にも関わらず、特赦を受けて政府官僚に登用されたのは、榎本の非凡な才能と豊かな知識によるものだった。政府機関〈開拓使〉官僚となつて北海道に着任し、その近代化に手腕を発揮することとなる。

そしてもう1人が**北垣国道**(1836~1916)。現在の兵庫県養父市に生まれ、幕末の倒幕運動に加わり、戊辰戦争では新政府軍の一員として戦った。維新後開拓使官僚に登用され、榎本の補佐役となる。階級上では榎本との開きがあつたものの、同年齢ということもあつて親密な関係を築き、長年にわたつて交友を続けたと伝えられる。開拓使での勤務は5年ほどだったが、のちの明治25(1892)年、第4代北海道庁長官の座に着き、再び北海道との関わりをもつこととなった。

明治5(1872)年、開拓使に着任して間もない2人は揃って小樽の官有地を、払い下げによって購入した。現在の小樽市街中心部にあたる稲穂町とその山側の、広大な土地だ。これが2人と小樽との縁の始まりとなる。購入価格は20万坪で計10円(ちなみに明治初期の幌内鉄道、手宮~札幌の上等運賃が1円)。高級官僚にとっては大した出費でなかったはず

だが、それだけに大部分が未開の、すぐには使える見込みもない土地だった。

そんな「安からう悪からう」とも思われる買い物をした2人がどの程度、小樽の将来性を見通していたのかは定かでない。しかし結果としてこの未開地は、購入後さほど長い年月を経ることなく、大きな価値をもつものへと変容していく。

##### ◆土地管理会社(北辰社)と寺田省庵

明治13(1880)年、手宮~札幌に、北海道初の鉄道となる**幌内鉄道**が開業した。2年後には幌内炭鉱までの全線が開通し、石炭の積み出し拠点となった小樽は、港湾都市として大発展を始めることとなる。また明治14年5月には当時、小樽市街の中心だった勝納川河口、金曇町で大火が発生。これを機に市街の中心は北側の入船、色内方面へと移っていく。榎本と北垣が所有する稲穂、帯の土地は俄然、価値が上がり始めたのだ。

その頃にはすでに開拓使の職を解かれ、北海道を離れていた2人が、小樽の土地を管理するために設けた会社が**北辰社**だ。その事務所は今の梁川通り近くに置かれた。



榎本武揚